
魔術について知ってる二、三の事柄。

| 1 i極il |

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術について知ってる二、三の事柄。

【Nコード】

N9990V

【作者名】

—li極il—

【あらすじ】

『七つの魔石を集めると、一つだけ願いを叶えてくれる』。
そんな有り触れた噂を耳にする青年ジュエルは、それをありえないと一笑に伏せていたが、ある日突然緑色に輝く宝石が墜落してきて、さあ大変。

その日を境に宝石目当ての悪の組織とやらが彼の命を狙いにやって来て、ジュエルは泣く泣く逃避行劇を繰り広げる事を決意する！

コメディ―とシリアスを織り交ぜた異世界ファンタジー小説。
…そうなければいいなと思っている。

プロローグ

―その日の夜、流れ星が降っていた。

星へ降り注ぐ流れ星は、地表へ辿り着く前に藻屑となって消えてゆく。

流星群と呼ばれるこの空の事象は、宇宙を詳しく知らぬこの星の人々の注目を集め、後世にこの時の事を書き記される事になる。

恐らく、人々も見たであろうあの流れ星を。

高い空の中で盛大に弾けて飛んでいった、七色の流れ星を。

それぞれ別の色がついた星は、意思を持っているかのように曲がりくねって土地に落ちる。

そしてその内の一つ：

碧の色に輝いたその流れ星は、とある青年の住む村へと真っ直ぐに落ちて行った。

第一話 巨大エメラルド、爆誕

「…どうしてこうなった!?!
何が起こったんだ一体!?!」

そう、崩壊した自宅の前で嘆くのは『ジュエル・ストリーム』。

彼の目に映るのは、ただの瓦礫と成り果てた自宅と、その真ん中に突き刺さった巨大な緑色の宝石。

…さて、どうしてこんな状況にジュエルが陥ってしまったのか。

それを説明するには、少し時を遡らなければならない。

—§||☆||§—

「…どこもかしこも、同じニュースばかりだな…。

別に俺はどうだっていいんだよ、流れ星の事なんて」

自宅のソファに座りながら、リモコンを操作してテレビのチャンネルを切り替える男が一人。

そう、これが今回の被害者、ジュエルその人である。

因みにこのカラーテレビ、ここ『アルバード大国』ではつい最近に普及したばかりで、割と金持ちな人間しかこれを楽しむ事は出来ない。

…科学の存在しないこの世界で、どうやってテレビ放映を実現して

いるのか、というのは趣旨から外れるのでまた後日に説明するでしょう。

…とにかく、同じニュースの繰り返しにウンザリとしていたジュエルだが、とあるシーンへと移るとそのリモコンを動かす指を止める。少し粗い画面の向こう側に、今までとは気色の違う流れ星が現れ、キャスターが騒然と騒ぎ出す。

「…へえ、七色の流れ星、か。
流星群ともなると珍しい事も起こるんだな」

暫くその七色の流れ星はゆっくりと高度を下げていったかと思うと。

『ぶ、分裂しました!!
あれは一体なんなのでしょう!!
もしかすると、あれが昔話に存在する、七色の魔石なのかもしれま
せん!』

「いやいや…流石にそれはねえよ」

熱狂的にカメラに喋りかける、キャスターに向かって呟くジュエル。
勿論、その言葉に反応する者は存在せず、空間に虚しく声が響くだけ。

テレビの画面を消し、上着を着て玄関へと向かうジュエル。

「そろそろ腹が減ったしな。」

サリナン家でも行って、何か掻っ払ってくるか」

ニヤツと歪な笑みを浮かべて玄関の扉を押し開ける。

——その刹那。

巨大なエメラルドがジュエルの自宅を押し潰し、この地へと爆誕した。

—§||☆||§—

なるほど、彼が混乱してしまうのも無理はない。

誰がその七色の流れ星が、自分の家に落ちてくるなど予想できるものだろうか。

「こんな真夜中に一体なんの騒ぎ…はああああ!?!」

もう夜も遅い時間。

流れ星の墜落音は、その地域に住む住人の目を覚ますには十分すぎる力を持っていた。

案の条、倒壊した彼の家の周りには騒音を聞きつけた野次馬達が集い、おっかなびっくりといった様子でその現況を眺めていた。

「……………」

不意に、ジュエルが立ち上がり宝石へと歩みを進める。

野次馬達の視線は宝石から、不審な行動をとり始めたジュエルのもとへと向かう。

そんなものは意に介さず、宝石の隣へと立った彼。

…おもむろに宝石を足蹴りにし始めた。

「この野郎、この石風情があー！！

流れ星だか魔石だかなんだか知らねえが、せめて落ちるのならもう少しまともな場所に落ちろよ森とか山とか古城とかにさあっ！！
ダイレクトに民家へ墜落してくんじゃねえよ！！

明日から俺はどこで寝泊まりすればいいんだよ！？」

暴挙である。

得体の知れぬ物質を無為に扱う事の危険さを、この国の住人は嫌という程に知っている筈なのに、それをガシガシと蹴りつづける。

…馬鹿と言う他無い。

まあ正直、自分の家をあそこまで破壊しつくされたのだからその気持ち分らないと言えば嘘になるが…

勿論、その暴挙を止めようとする行動に出る者もいた。

「ちょ、ちょっと何やってんのよアンタ！？

下手したら死ぬわよ！？」

野次馬の群れを押しつけて、ジュエルを羽交い締めにして押さえ付ける灰髪長髪の少女。

「離せ、離すんだサリナ!!」

俺はこの宝石を真っ二つに叩き割らなければいけないんだ!!」

「いやだからそんなに妖しく光る宝石が普通の代物な訳ないでしょうが!!」

そんな事したら一体何が起こってしまうのか分かったものじゃないわよ!？」

必死にその宝石から遠ざけようと、焦りながらジュエルを引きずる少女の名は『サリナ・アンドレイク』。

見ての通り、派手に暴れる成人近い男性を無理矢理押さえ付けられるような馬鹿力の持ち主だ。

「うるさいうるさいうるさあああ!!」

男に二言は無いつ!!

壊すと言ったらこの宝石をブチ壊すまで男の暴走は終わらないのだ!!」

「二言があって欲しかった……キャアッ!？」

ジュエルに、いや正確には彼の魔力に無理矢理引きはがされて、彼女は瓦礫の上から弾き出される。

彼の腕を纏うのは、彼が操る風の魔力。

——奇しくも同じ、緑色。

「ちょ、わざわざ魔武器を出す必要も無いでしょうに!!」

サリナはジュエルが具現させた、槍らしき物を見て叫んだ。

：簡潔に説明すると、魔武器とは魔法戦士や騎士なんかが戦いを挑む際に使用する、魔法の付加応用が可能な武器の事。

そして今、ジュエルはその自分の魔武器を手に取り、刃の先端に魔力を集めて攻撃を企んでいる。

：因みに名前は《風矛【風牙】》と呼ぶらしい。
素晴らしい中二病である。

「割れろおおおっ!!」

してその風牙を彼は、その宝石へと突き刺した。

一片の手加減なく、その後の弊害を知らずに。

さて、その弊害とか一体何を指差すのだろうか。

一つ目。

沢山砂埃が舞い上がり、間接的な目潰し攻撃を食らわせる。
自分も攻撃範囲である事は間違いない。

二つ目。

瓦礫が飛散して、村が悲惨な事になる。
勿論怪我人も数人であるであろう、瓦礫は重いから。

…そして、三つ目。

想定外な、非常事態に対する反応をとる事が出来ない。

そう。

『…ふう。中々、今の魔力は美味だったぞ、人間よ』

今、この時のように。

第二話 緑の魔石とお姫様

『…ええ、そうです。』

ここから南東に4、5キロ先に進んだ森で、異様な魔力を感知しました。

恐らく、そこにターゲットは潜伏していると思われます』

ノイズ混じりの声が、無線の奥から響いて聞こえる。

彼率いる、黒装束の軍勢は、真夜中の溪谷を闊歩しその森とやらに向かっていた。

「…そこに居ると見て、間違いないな？」

『ええ、魔力の属性、質、量からして間違い無いと思われます。』

分城が陥落して、今やあの魔石を持っているのは彼女しか有り得ません。

…必死に逃げ延びているようですが、所詮は弱い王女様。

我々の手に落ちるのはもはや時間の問題でしょう』

「…そうか。」

任務を引き続き続行——」

彼は無線を切ろうと、上部のスイッチに指を伸ばす。

…しかし、その後に聞こえた声が、彼の伸ばす指の動きを止めた。

『…なんだ、これは…!?!?』

「どうした!？」

『新しい魔力が検知されました…!!』

深い緑色の魔力…

恐らく先の光の魔石と、ほぼ同等の…!』

「…何? どういう事だ?」

『は、はい。』

光の魔石の魔力が検知された森の、更にそのすぐ先…

風奉りの谷に、風の魔石の魔力が…!』

「本当か!？」

まさか、こんな奇跡的に同じ場所に魔石が現れるとは…

王女様が魔石を空に解き放った時はどうなるかと焦ったが、運命の女神は私達に微笑んでくれているようだ」

知らず知らずの内に握りしめてした手から、一筋の血が流れ落ちる。

(…何と言う幸運…

二つの魔石を持ち帰れば、私の二階級特進も夢では無くなる…!)

顔に現れた微かな笑みを消そうと唇を固く占めようとするも、効果は無い。

「分かった。お前は今までと同じように任務を続けろ。

…魔石は二つとも、私が回収する」

『…大丈夫、なんでしょうか。』

魔石は昔から持つ者を選ぶと…」

「私の剣の腕は伊達じゃない。
お前達がこの世に生まれる前から剣を振るって来たんだ。
安心して、任務に戻れ」

『…了解致しました』

プツン、と回線が切れた。

—§||☆||§—

『…中々美味だったぞ、人間よ』

風矛が突き刺さった先にあった物は、バラバラに砕けた緑色の破片ではなく、宙に浮かんだ、碧色の宝石だった。

「んなぁっ!？」

サリナは目を見開いて、その宙に浮いた碧色の宝石を凝視する。

『どうしたその人間、何故我を食い入るように眺め見る』

その視線に気づいたらしい宝石は、無い顔をサリナに向けてそう言った。

「な、なんでって…」

何なの、アンタ…

無機物が喋るわ、凄く濃い魔力が辺りに漂うわ…」

そこで一旦顔を伏せて、その宝石の真横を呆れた目で見遣る。

「どっかの誰かさんは、今だに矛を突き刺し続けるわ…」

『…別に痛くはないが、ここまでされると鬱とおしいのでこやつを離して貰えるか?」

「一度張り付くとスッポン並の粘着力を発揮するから、私には無理よ…」

「無駄話してねえで自宅弁償しろよ宝石さんよお！
喋れるんならなおさらだ!!」

『…成る程。

それなら致し方あるまい……」

その瞬間、はっきりと目で見て取れる程に濃厚な魔力が発せられる。

まるで宝石が爆発したかのような衝撃が瞬時に発生する。

宝石の上を陣取って執拗に攻撃を加えていたジュエルは勿論、そこから少し離れた場所に立っていたサリナまで吹き飛ばされそうになる。

「うおおおっ!?!」

「ちょ…こっち飛んでくるなあっ!!」

足を付ける場所を無くしたジュエルが空をさ迷い、丁度よくサリナ目掛けて飛来して行く。

それを拒否するようにサリナはあろう事か、迎え撃つかのようにフアイティングポーズをとって睨み付けるようにジュエルを見る。

「……!？」

そして空を飛びながらそれを見つける導体視力に優れたジュエル。

「…え、えーとまさかぶん殴ったりしませんよね、サリナさん？」

「あら、今日はやけに感が冴えてるじゃないの」

そんな恐れを抱くジュエルに、肯定と取れる返事を返す。

そして。

「吹き飛ばやあっ!!」

バキイイイツ!!!

タイミング良く目の前に現れたジュエルの頬に、戸惑いなく拳を叩き込んだ。

「…チッ!!」

急いで自分の頬を魔力でコーティングしたのね…

通りで手応えが無い訳だわ…」

『…我としては己の友人を躊躇なく殴れる事に疑問を覚えるのだが

…』

「死なないわよ、ジュエルなもの」

そういつてサリナは岩壁にぶつかり、ずり落ちた瓦礫の中で一時の眠りについたジュエルを見遣る。

『…いや、そう言う問題じゃなく…ぬ?』

「…どうかした?」

『…強大な光の魔力がこの場に迫って来ておる。
…かなりのスピードでな』

はて?と首を掲げたように喋る宝石。
…首なんて存在しないのだが、実際。

「…それって一体どれぐらいの?」

『ふむ。どうやら我とほぼ同じぐらいの魔力のよう——』

答はエメラルドが喋り終わる前にやって来た。

ドスン、と大きな音を立てて丸い宝玉がエメラルドの上へと墜落する。

「!?!」

再び目の当たりにする異常事態に、サリナは大きく目を見開く。

そして、白い宝玉の上で死んだようにぐっすりと眠る――

「……………ここは……………何処……………？」

――否。

たった今日を覚ました、純白のドレスを着たお姫様がいた。

第三話 黒き鎧は叩き割られた

「……………ここは……………何処……………?」

軽く寝ぼけている、純白ドレスの少女は頭をフルフル揺らす。

慣性も手伝って、後頭部に結われたポニーテールも踊るように揺れた。

「……………」

あんぐりと口を開けたまま、微動だにしないサリナ。

その視線の先には、彼女の顔。

(え……………!?)

この娘つてもしかして……………!?)

そしてその下、首にぶら下がるアクセサリーに目を向ける。

それはロケット。

飾り付けられた高貴な装飾は、肅然たる王家の証。

恐らくサリナにはそこまで見えてる筈もないだろうが……………

そのロケットの縁の場所には、しっかりと『MARY ALBARD』と言うアルバード家の氏を持つ名前が刻印されていた。

そう。

サリナが言いたかったのは。

(…アルバード王家第三王女『メアリー・アルバード』その人じゃない!?)

この前テレビで見たことあるわよ…!?)

ちなみにその時はポニーテールでなくロングヘアーだったため、すぐには彼女と分からなかった。

サリナがそんな事を考えている内に、ついにメアリー殿下が意識を覚醒させたらしい。

いかにも大人しそうな童顔に、ポケーっとした表情を浮かばせ。目の藍色の瞳を辺りに右往左往させる。

始めに真正面のサリナへ。

次に瓦礫に埋もれた旧ストリーム家家屋へ。

そして最後に自分の乗っている魔石に踏み潰された、ジュエルの姿を確認して。

「……はわわわわあ!?

な、何がどうしてこうなってるの!?

ねえその人大丈夫ですかっ!?

…外見に似合わないテンパった声をあげて、宝石の上からジュエル

を揺るのであった。

「……！……！？………！！！？」

魔石の下でゆさり揺らされ、声に成らない悲鳴をあげるジュエルを、急いで救出しようとする。

「ま、まずはその魔石の上からどいて！？
死ぬから！！ジュエルホントに死ぬから！！」

…まず、彼女が本物の王女かどうかは置いといて、ジュエルの安全を確保する方が先のようなだ。

—§||☆||§—

「…アンタ空飛べたりしないの？」

移動して、サリナ宅。

リアカーにエメラルドの魔石を、両手にダイヤモンドの魔石を抱えてサリナは自宅の居間へとこれを運送していた。

『むう…まだこの媒体には慣れていなくてな。

自由に魔力を解き放てるようになるまで、後暫く掛かりそうだ』

『私も同じですわね』

エメラルドに呼応するように、白いダイヤモンドもそう答える。

ダイヤモンドはメアリーが乗ってきた白色の魔石であり、これも暫くしてエメラルドと同じように喋る事ができる事が発覚した。

『運ぶのが遅いですわ!!』

もつとテキパキ動きなさいな!!』

因みに凄い高飛車な性格だった。

「うっさいわね…

地面に叩きつけて砕くわよ」

『なんて無礼な言葉使い!!』

わざわざ私を運ばしてあげてるのよ!!?

その汚らしい庶民の手で運べる事を光榮に思いなさいな!!』

「おっと、汚らしい庶民の手のせいで滑った」

サリナはダイヤモンドを床に叩きつけ、バウンドした所を更に思いつき蹴り飛ばした。

明らかに故意の出来事だとか、分かりきっている事を彼女に言っ
てはいけない。

『きゃあああああ!!?』

な、何をしなささるの!!?』

「ちょっと手が滑ったのよ。

許しなさい」

言葉を嚼んだ事は華麗にスルーするサリナ。

『両手を上げて勢いよく下に振り下ろしてましたわよねえ!?!』

「立ち幅跳びの練習してたのよ」

『今ここで行う事じゃないですわよねえ!?!?』

「あ、ついたわよ。

エメラルドの方、落ちないように注意して。
位置を調節する事は出来る?」

『ムキーーーー!!!』

ここまで虚仮にされたのは生まれてこのかた1464年ぶりですわ
っ!!!』

「あーはいはい、そうですか。
で、大丈夫なの?」

『恐らく大丈夫だろう。
微かに操れる魔力で腕を形成すればなんとか』

「そう。じゃ、落ちないように気をつけなさい」

そこまで言うと言サリナはリアカーを、ジュエルの横たわるソファー
へ軽く蹴飛ばす。

「おっとつと…
はいキャッチ」

『む、すまぬな王女殿』

それを先に居間で待機していたメアリーが受け止め、リアカーの上に転がっている魔石を取り、ソファアに乗せた。

『ふん、まさか私もあんな物の上に乗せるなんて言い出さないでしようね?』

「当たり前よ。

アンタはシャンデリアの代わりとして天井に吊しておくわ」

『なんでそうなるんですの!?!』

「映えるもの」

『御免被りますわ!?!』

「あ、王女様、そこら辺に代用の紐糸おいてなかった?」

「ん、これの事?」

メアリーの手には細長く白い一本の紐糸が。
シャンデリアをぶら下げているものと同タイプの物らしい。

『冗談じゃなかったんですの!?!』

「えーと、どこに括りつけばいいのかしら?」

『話を聞きなさい!?!』

「うーん…やっぱりぐるぐる巻きにして天井にぶら下げるのが1番

じゃない？」

『メアリー、貴女も何を言っているんですの！？

助けなさいよ、貴女に加護魔石ですよ、私は——』

途端、グラッと地面が揺れた。

「…敵襲か？」

今の揺れで目が覚めたのか、ジュエルが目を擦りながらサリナとメアリーの二人を交互に見る。

「…うおっ！？」

なんで第三王女がこんなところにいるをだよ！？」

「今そんな事話す場合じゃない事ぐらい分かるでしょうが！！」

その寝ぼけ面を矯正する為、サリナはジュエルの顔面に拳を叩きつけた。

玄関の方に吹き飛ぶジュエル。

『…仲間を殴っている場合でもないと思うが…』

エメラルドがそう小さく呟くが、その声が届くはずもない。

そしてサリナが向かった玄関先から、黒い鎧を纏った謎の男が。

彼は居間でへたりこむドレスの少女を指指し、大声で——

「――いたぞ！！メアリー・アルバード王女――」

「帰れ不法侵入者ああああああああっ！！！！」

「おぶええッ！？」

――叫ぼうとした。

彼は虚しく空を放物線上に飛んでいく。

サリナが殴った個所に鎧はもうない。

粉々に砕け散ったからだ。

そしてそれを受けて気絶するだけのジュエルは一体なんなのである。
う。

『…貴女、容赦ないですわね…』

「あーもう外が騒がしいわね！！
一体何が起こってるのよ！！！」

「ちょ、分かったから引っ張るな、引っ張るなって……！！！」

二人が出ていくのを呆然としながら見るメアリー。

（…黒い鎧が、私を捜しにここまで来ている？
まさか…あいつらは…）

胸の奥では、言いようのない不安に心臓が今まで以上に波打っていた。

第四話 拳は我と共にあり

——風奉りの谷は、今や散々たる有様だ。

ジュエル達が家の外へと飛び出た時点で、村の大部分に火の手は上がっていた。

黒い鎧の不法侵入者をその拳で成敗したばかりであるサリナは、倒れたその男の胸倉を掴む。

「アンタ…誰に許可取って人ん家入ってきてんのよ…？」

「き、貴様…俺達を誰だと思ってやがあるぶええッ!？」

「さっさと答えろゴミクス!!」

威嚇しようとする鎧男を、問答無用で殴り付ける。
まさに鬼畜の所業。

「ば、馬鹿な…スタラプリズ鉱石製の鎧が餓鬼の拳に破壊される筈が…あぐうッ!？」

「残念ながら本気の私の拳の強度はオリハルコン並よ」

反撃のスキも晒さずにただ殴り続けるサリナ。
これを悪魔と言わずになんと言おう。

「も、もう勘弁してくれ…」

「あら、ちゃんと話す気になったの？」

兵士がそう懇願すると、サリナはあっさりと殴るのを止め、馬乗り状態を解除する。

ようやくその拳の応酬——勿論拳と命乞いの応酬であるが——それから逃れ出る事の出来た兵士は、ガクブルと震える脚の代わりに地面に一本の長剣を突き刺して。

「…さて、なんでこんなふざけた真似仕出かしてるのか、説明——」

「——してやる訳ねえだろうがボケがあッ!!」

あろうことか、その地に突き刺した剣をサリナの頭部目掛けて突き出した。

「——……っ」

予想外の反撃に不意を突かれ、その不意打ちを甘んじて受けてしまうサリナ。

強い衝撃が、サリナの頭部を襲い。

気が付いた頃には、彼女は既に膝から崩れ落ちていた。

「…へッ、ざまあみろってんだ。

殺すには惜しい上玉だったがこの際仕方ねえだろうよ」

突き出した状態のまま行動を停止していた剣を鞘へ戻し、捨て台詞を吐いてサリナに背を向ける。

「そうよねえ、仕方ないわよね」

だから、気がつかなかったらしい。

サリナが倒れる直前に、腕をバネにするように受け身を取り、

「んまだ生きてやがったのかテメェ!？」

「…六十九の殺人技、其之三四……!!」

そのまま、奴の両肩に側面から着地して地面にぶっ倒す。

「――雷落し!!」

「ぐぶらっ!？」

そして倒れた男の顔面に、に強烈な踵落としを見舞わせたのだった。

「…うっわー、惨いなお前…」

後から到着したジュエルがその惨状を見て、思わず眉を潜める。

今の兵士の顔は、歯が折れ、鼻も折れ、先の踵落としによって輪郭

も大きく捻れたように変格している。

…これは酷い。

しかし、その惨状を見てさえ、当の本人であるサリナは反省の色を垣間見せる事は無かった。

「良いじゃない、コイツ私殺そうとしたのよ？
それは重罪に値する、オラァ！！」

「ギャブウツ！？」

むしろ、倒れている兵士に最後の追い打ちを加えたのだった。

「…まあ、ストレス発散はそれぐらいにして、な」

話が進みそうに無いので、そろそろジュエルがこの暴力の連鎖を止めようと画策する。

サリナが足を振り上げた一瞬の隙を狙い撃ち、風の下級魔法を一旦兵士にぶち込み、救出する。

それと同時に倒れた兵士の下からミニ竜巻を発生させ、兵士を遥か彼方へと吹っ飛ばしたのであった。

…この男も中々えげつない事をする。

「…む、そうね。」

まずこの村に蔓延るクソ兵士どもを殲滅しに行くのが大事よね」

『…どうしてその娘は暴力的思想しか出来ないのだ』

「生まれながらにして患ってしまった思考障害なんだ。触れずにやってくれ」

勿論口から出任せである。

「…んじゃ無くて、まずはあれだ、住人達の安否を確認するのが大事だろ。」

…てかエメラルドは部屋に居たんじゃなかったのか」

『何分暇だったものでな』

「誰が思考障害ですってえええ!!!」

「今更かよ!?! 折角真面目な話題に踏み込んだのに蒸し返すなよ!」

『……む』

エメラルドの宝石が、一つ不審な影を見つけて声をあげるが、それに反応する者はいない。

「私は場の空気等には囚われない!!」

ジュエル、アンタを今この場で成敗してやる!!
喰らえ!!!」

ジュエルの背後にその黒い影が忍び寄った、その瞬間。

サリナの渾身の一撃が、爆発した。

「危ねええええええ！？」

「ぐはあっ！？」

後ろの黒い影——いかにもリーダーっぽい、豪華な黒い鎧を装着した兵士に。

オリハルコン並の強度を誇るサリナの鉄拳に、勿論只の鉱石で作られた鎧が敵うはずが無い。

そしてこの黒い鎧の男：

実は二話の冒頭で『お前達が生まれる前から剣を振って』居た男である。

いかにもボスっぽい台詞を吐いていた彼だが、瞬く間に瞬殺されてしまった。

これほどまで酷な事があるだろうか。

「…アレ？コイツ誰？」

思う存分拳を振り切り、満足したサリナは目標とは違う顔が足元に倒れていて、怪訝に思う。

「お前が俺に不意打ちしようとした奴をぶっ飛ばしたんだよ…」

「え、本当に？」

「じゃあもう一回アンタをぶん殴る必要がありそうね」

「お前もうホント自重しろよ」

そうジュエルが必死にサリナを宥めているのを尻目に、エメラルドが倒れている男に近づき、確認する。

『闇の帝国の尖兵隊隊長の意識を、たった一撃で殴り飛ばすなどどんな握力をしてるのだ娘』

もし宝石に表情がついていたのなら、恐らく愕然とした表情をしていただろう。

エメラルドの発した声音の中には、驚愕の色が見て取れた。

：いや、この場合は聞いて取れた、の方が正しいのだろうか？

「：握力×体重×スピード＝破壊力。
也乃ち、宇宙の法則である」

「その方程式どっかで聞いたことあるぞ…
なんだったかな。

確か最強の男の息子が――」

『待て待て。それ以上言ったら世界規模的な理由でマズイ。
後もうちょつと驚くべきところがあるだろう？』

しかしサリナはどうでもよさ気に髪を風ぎる。

「いいじゃない別に。漫画ではかなりの頻度で起こり得る、お約束の展開よ」

『現実と空想を混じるな』

どうやら彼女には、世間一般の常識なぞ通用しないらしい。

それを痛感したエメラルドは、矛先をまだ辛うじて話の通じそうなジュエルに転換する。

：冷静に考えると、この場で一番常識的で無いのは、ただの無機物である筈のエメラルドなのだが。

『：闇の帝国の尖兵隊の実力は異常だ。

君達のような一般人とは思えない程の強さを誇る猛者は別だが、一般市民が敵うような相手じゃない』

「念の為言っておくと、一応俺もお前のいう一般市民だからな？」

そのところ、履き違えないように覚えておけよとジュエルは釘を刺す。

そして、後続ける。

「：それに、尖兵程度の連中なら問題ない。

この村には、完全無欠の村長様々がいるからな」

『程度……貴様、闇の尖兵団一師団だけで、街一つ軽く征服出来る実力者が揃っているんだぞ？

とても一人間、それも老人が敵うような相手では——』

「おっ、早速一人打ち上げたみたいだな」

そのジュエルの言葉に、エメラルドの宝石は言葉を区切り、空を視る。

成るほど、確かに打ち上げられている。

黒い鋼鉄の鎧を身に纏った男が一人。

空で鎧バラバラに崩れさせて、ソレは徐々に重力に引かれて墜落してゆく。

ドッガアアアアアン!!!!

「…今日は厄日か」

「……………」

サリナは目の前の惨事を見て、絶句する。

アンドレイク家屋敷は、大きなクレーターと瓦礫をそこに残して、消滅していた。

第五話 夜空に光るは黒い連星

「村長ッ!! 大変です!!」

——ジュエル達がアンドレイク家屋敷にて黒い鎧の兵士と遭遇する、数刻前。

村の最西端に位置する他の家屋より少々立派な建物。

そこのドアを一人の男が、必死の形相で何回も何回も叩いていた。

「…何よ、煩いわね。今何時だと思ってるの」

扉が開き、気怠そうな表情を浮かべながらそこから出て来たのは妙齢の緑髪の女性。

右目を擦っている様子を見ると、つい先ほど目覚めたらしい。

「マリスさん呑気に寝ている場合じゃないですよ!!」
敵襲です!!

それもあの『黒装束の並列』!!」

「あん? ああ、隣国の黒兵どもの事か。

あんな雑魚ども、教育所の連中に任せりやなんとかなるだろう?」

それだけ言うともマリスは「じゃ、もう一眠りするか」といって、玄関を後にする。

「ちよ、そんな簡単に済まさないでくださいって!?!」

焦った男はマリスの襟首を引っつき、引き戻そうとする。

「…あんた、村長の妻をそんな乱暴な形で引き戻そうなんて、中々度胸あるじゃないか」

「変な事に感心しないで、真面目に聞いてくださいよマリスさん
!!!
そもそも教育所の連中が無事だったらこうして貴女達のところまで行きませんって!!!」

「それもそうだ」

たった今重大な情報を聞いた筈のマリスは、たったのその一言で受け流す。

「……………で、なんだい?
本件は?」

「今言ったばかりじゃないですかああああああっ!!!」

男、絶叫。

マリス、耳を塞ぐ。

「ばっ…、こんな夜中に何バカデカイ声出してるんだ!?!
御近所方に迷惑だろう!!!」

「へぶるばっ!!!」

そしてどこからともなく取り出したフライパンで、その男の頭をおもいつきり打ち付けた。

…酷い。

「…な、何も全力で殴る事…」

「あんた人としての礼儀を教えるべきみたいだね…！
正座しな、正座！」

「んなっ、何トチ狂った——」

「い い か ら 座れえッ！！！」

「ひいッ！？」

マリスのあまりの気迫に圧倒されてしまった男は、真に不本意な事に地面の上に正座する羽目になってしまったのだった。

…しかし第三者から見れば、マリスの方に非があるのは火をみるより明らかだろう。

「全く、あんたは今まで一体どんな教育受けてきたんだい？

この村の一人として生きるのなら、ちゃんと村のルールを守って貰わなくちゃさね」

「そ、それは解りますが何分今は非常事態——」

「まだ口答えるかぁッ！！」

「ヒィイツ!?!」

男、涙目。

ここまできたらもはやマリスの方が近所迷惑だろう。

男はそう思ったが、口に出すことは出来なかった。

今一瞬でも反抗すれば、今度は殺されかねないからだ。

「もういい、解った!!」

クラム、あんたがその気ならこちらとてそれ相応の対応を取るまでよ!!」

「おいそこの貴様!! 今すぐ両手を挙げて地面に伏せろ! さもなくば貴様の命はな——」

「だ ま ら っ し ゃ い !!」

フライパン、フルスイング。

どこから沸いて出て来た黒い鎧の男の顎下に、宙を切り裂いて飛躍するフライパンがクリティカルヒットする。

男は声も出さず、否、声も出せずに放物線を描きながら気絶した。

「……………今ですって!! 今見たいのが今村中にわんさか居るんですよ!!」

「…こんな雑魚いのかい?」

「それはマリスさんが強すぎるんですよ!？」

しばらくの間哑然と口を開きっぱなしだった男——クラムだが、気を取り直して指摘する。

そう…この風奉りに谷の村長である『ネグティブ・ラオス』、並びにその妻である『マリアゼル・ラオス』は、強い。

そもそもこの風奉りの谷は風属性の魔術師達が集う修業の里として作られた村。

村長達が兵士達を一撃でぶっ飛ばせる程、一般を逸した実力を持っているもおかしくはないのだ。

…勿論、家庭用の何の変哲もない鉄製フライパンで、尖兵を吹き飛ばした事も含め。

「…で、どうしようか、マリスさん。

闇の尖兵隊の対処は。正直教育所の連中が敵う相手とは思いませんし。

てか既に倒されてますし」

「…ったく、だらしの無い連中さね。他に奴らとやり合えそうなのは、村にいないのかい？」

ようやく話がマトモな方向へ進んだ…。

そう、マリスにバレないようにそっと一息付くクラムだった。

「…実力的には私、貴女達二人と、自衛隊上層部の従属傭兵達…そ

れとストリーム家とアンドレイク家の子息達でしょうか」

その二つの名前を聞いて、マリスは思い出した。

この辺境の村にも一応、学園という程大層な物ではないが、『教育所』という育成施設が存在する。

しかし教育所には、まずテストもなければ一定の期間さえ通い続ければ授業を受ける義務もない。

なので最低限の授業だけ受講して、それ以後はグータラ自宅で過ごしている怠け者が多い訳なのだが。

「…そういや、高等部の授業領域に入っても、未だ授業を受けてる物好きが三人いたねえ…」

「多分彼らの実力を考えれば、自分の身ぐらいは守れると思います
が…このままだとこの村占領されてしまいますよ?」

戦闘訓練で教育所の教員達を一切寄せ付けず、それでもかとフルボツコに叩きのめすジュエルとサリナの二人だが、それでもこの状況が不利な事には変わりがない。

腕利きの傭兵達が居るいは居るが、せいぜい5、6人ぐらいの筈だ。

対し、相手側の兵員は約150相当。

まさに、多勢に無勢。

「ちょっと本気を出すべき時なのかねえ、これは。
筋肉痛になるから嫌なんだけけれども」

「…大丈夫ですか？ マリスさんといえども、闇の帝国尖兵の連中ですよ」

「フン、嘗めるんじゃないよ」

全身に風を纏い、宙を浮くマリス。

そんな彼女は不満気に鼻を鳴らし、クラムをジロリと睨み見る。

「私あ風奉りの谷の村長の妻。

あの人に相応しい人間になれたんだから、それなりの強さを誇っているつもりさ。

それに…」

不適な笑みを浮かべ、マリスは言う。

「もし私が取り逃がしても、私の旦那が一網打尽に捕まえてくれるさ」

言葉を発しながら、マリスは両腕を大きく開く。

掌に集束するのは、多大な質量の緑色の光体。

「なんたって、旦那は元『風帝』だったんだからねえ！！」

そんな合図と共に、マリスの両手の光が爆発した。

手首の部分を重ね合わせ、上下に大きく開いたその根本から緑色の光線が噴出される。

右端から左端へと、一掃。

その光線が当たった兵士達は、風の魔力に吞まれ、錐揉みしながら空へと吹き飛んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9990v/>

魔術について知ってる二、三の事柄。

2012年1月13日08時48分発行